

LA FOLLE JOURNEE au JAPON



5月3日(日)
ブランデンブルク広場
ミュージック・キオスク

屋台がずらっと並び、お祭り気分にとことん浸れる地上広場(ブランデンブルク広場)。その中央に設置された野外ステージ(ミュージック・キオスク)には、今年もさまざまなジャンルのアーティストが出演。やはり大空のもと、音楽と触れあえるのは最高の贅沢。大勢の人が幾重にも重なりあひながら演奏に聴きいつている姿は、いつみても感動的。みんな純粋に音楽が大好きなんだと、思わずにいられない。ぜひぜひ、普段おこなわれているクラシック・コンサートにも足を運んでほしいなあ……。

「ひたむきさと瑞々しい感性が誘う、爽やかな感動」

5月4日(月) 公演番号 272 G409

北村朋幹(ピアノ)

J.S. バッハ: カプリッチョ『最愛の兄の旅立ちにあたって』/ 幻想曲とフーガ/ 前奏曲/ ヌメット/ フランス組曲第6番

2005年東京音楽コンクール第1位、2006年浜松国際ピアノコンクール第3位、2008年シドニー国際ピアノコンクール第5位入賞。そして今年1月にパリで初の海外リサイタルをおこなうなど、着実にキャリアを積み重ねている北村さんは、2007年からLFJに出演。演奏者と聴き手の距離が近く、サロンのような雰囲気音楽を楽しめるG409で、バッハの世界を見事に描き出していった。天を仰ぎ見たかと思えば鍵盤の奥へ入りこんでしまうかのように身をかがめ、全身で音楽を表現、そのひたむきさと瑞々しい感性が香り立つ演奏に、爽やかな感動が沸きあがった。



北村朋幹さん インタビュー

——今年で3度目の出演となったわけですが、改めてこの音楽祭の感想を!

「LFJは、素晴らしい演奏家ばかりが参加しているので、自分が演奏しているとき以外は、一ファンとして楽しんでます(笑)。それに、自分が出演しなくても、絶対に来ていたと思います!」

——今回はバッハがテーマ。北村さんは?

「実は最初、弾くつもりはなかったのですが、ぜひ演奏してほしいと言われたので、初日はインヴェンション&シンフォニアを全曲演奏しました。オール・バッハで演奏会をおこなうのは早すぎるというのも理解しているし、まだ完全な形ではないかもしれませんが、でも、この経験は10年後とか20年後に、もしもオール・バッハでやろうと思いついたら、絶対に生かされるだろうなって思っています」

——どんなところにバッハの魅力を感じていますか?

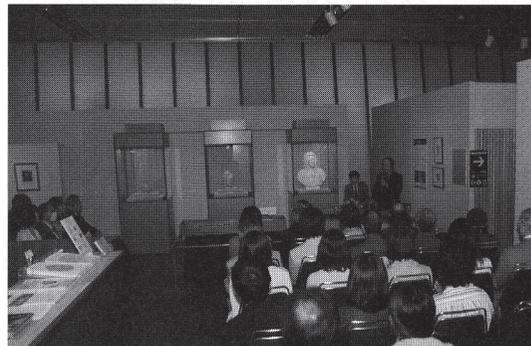
「曲の構成です。分析すると、「目からウロコ!」みたいな曲が結構あって……。それから人間味がすごくていいところです」

——現在、高校3年生。活動の幅も広がっているが、今後、取り組んでみたいことは? 「室内楽や伴奏です。学校ではやっていますが、なかなか人前で弾く機会がないので、ぜひやってみたいです」

——では、どんなふうにも音楽を表現し、伝えていきたいと?

「意図的に狙ってやるわけじゃなく、『この人がこの曲を弾いたらどうなるんだろう』っていうように、聴いてくださる方が想像つかないというか、興味を持たされるような……そんな演奏ができればと思っています」

チェンバロも
展示された



海老澤敏氏による講演会の様子

新鮮な驚き! 『バッハの素顔』展 相田みつを美術館 第2ホール

4月28日から5月10日まで、相田みつを美術館で開催された『バッハの素顔』展は、最新技術を駆使してバッハの頭部復元をおこなったドイツの博物館『バッハハウス・アイゼナハ』の協力を得て実現。掘り出された頭蓋骨の模型に肉付けをし、復元された(バッハの素顔)は、あまりの生々しさに、びっくり! 展示会の企画監修者で音楽評論家の澤谷夏樹氏によるギャラリートークで、あの長い髪はカツラで、普段は衛生上、短髪で生活していた、という事実も語られたのだが、「この人が、バッハ……」と、衝撃を受けた人も多かったのでは。他に、バッハが愛好したクラヴィコード(18世紀ドイツモデル)やチェンバロも展示されており、実際にその音色が楽しめるミニコンサートや海老澤敏氏(音楽学者)による講演会もおこなわれた。訪れた人は、多面的に知ること、バッハ自身と彼の音楽に対する興味・関心度が大いに増したことだろう。



「誰でも気軽に生演奏を!」

5月3日(日)
新丸ビル3階 アトリウム
丸の内・周辺エリアイベント
ドゥオール ミニコンサート

街全体が音楽で彩られるこの期間、丸の内・周辺エリアでも、無料のコンサートやイベントが数多く開催された。誰もが気軽に生演奏を楽しめるのは、LFJならでは! ということで、5月3日の夕方5時、新丸ビル3階の『アトリウム』へ足を運んでみると……ピアノデュオ『ドゥオール』(藤井隆史&白水芳枝)によるミニコンサートがおこなわれていた。2004年にデュオ結成、CDもリリースするなど多岐にわたり活躍中のおふたりは、まるでひとりで音楽を紡ぎ出しているかのようにぴったり息の合った演奏で、多くの人たちの心を釘付けに。